

「今どき」の学生は変わったか
〜女子大学の生きてきた道、そして未来へ〜



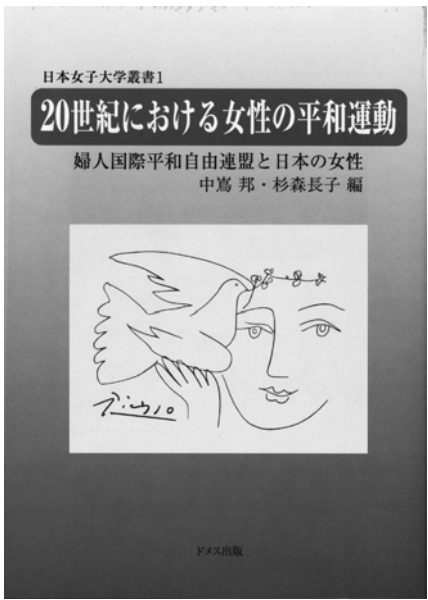
後藤 祥子

(日本女子大学長)

「今どきの学生は」とか「若い者は」とかいう年寄りの口癖は、何も今に始まったことではなく、私どもが学生だった半世紀前も同じ様であったし、さらに一世紀前も似たようなものであったらしいから、あまり気にしないことにしている。そもそもメールや携帯電話も普及していなかったわずか二〇年ほど前の不便さに比べ、意識も生活形態もすっかり変わってくるのは当然な話で、新しい利便と抱き合わせの不条理に折り合いをつけながら、新世紀を享受している、というのが若者にとっても我々年寄りにとっても現実ではあるまいか。幸いなことに、今まで、かつがっつ現役の私は、学生の新しい感覚にある程度は随いて行っているのではないかと自惚れているところがあって、そういう目で見ると「今どきの学生」は、予想以上に現実をしっかりと見据え、しかもその方向性は大人たちの良識を決して裏切らず、頼りになるものだということを目撃している。

ところで私どもの大学には、全学必修の「教養特別講義」というカリキュラムがあって、一年次のプログラムは創立以来の歴史を持つ軽井沢夏季寮でグループセミナーを開くのが恒例になっている。このところ、例年私は、憲法改正を国民投票で決めるという国の動きがとて心配になって、戦争を全く知らない世代がどんな

考えて投票することになるか、考えてみると恐ろしいものがあるので、本学の平和教育の歴史を伝えながら、学生にも自由な意見交換をさせて勉強会を開いてきた。それというのも、本学では創立者在世中に、第一次世界大戦に異議申し立てをしたインドの詩聖タゴールをたびたび学園や夏季寮に招いて講演会を開いたり、その影響のもとに当時英文学部の上級生であった高良トミ（学生時代は和田姓）がその後もタゴールの全国行脚に通訳として随って回ったりした歴史や、第二次世界大戦後の日米講和条約締結前夜に、平塚らいてうや上代タノ（当時まだ学長職にはなかった）が、植村環や野上弥生子、ガントレット恒子らとともに、「非武装国日本女性の講和問題についての希望項目」という文書を婦米直前のダレスに提出したといった歴史を持ち、この文書の草案が本学のアーカイブに保管されている。二〇〇六年の一〇月、衆議院憲政記念館が「女性参政権六〇年特別展」を開いた時に、これを展示資料とするため貸し出しを求められたといった経緯がある。上代タノと平塚らいてうはその後、核廃絶を訴えた平和七人委員会に湯川秀樹博士らとともに参加し、当時の附属校を含めた本学在校生たちに大きな影響を与えた。上代たちの活動の基盤には、成瀬が生前、関係を作っておいいた国際的な女性平和運動があり、WILPF（婦人国際平和自由連盟）と略称するその団体の日本支部を今も学内に置いている。本学の総合研究所は近年、叢書の刊行に踏み切ったが、その第一冊目が「20世紀における女性の平和運動」であり、「婦人国際平和自由連盟と日本の女性」と副題するものであったことは、平和運動が教育理念の背骨を成すものとして理解されていることの証と言えよう（二〇〇六年五月刊 ドメス出版）。



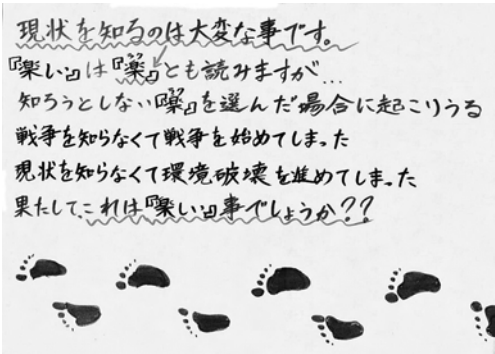
20世紀における女性の平和運動

同書には、一九一五年にオランダのハーグで開かれた国際女性会議の会長ジェーン・アダムスから、一人も参加の無かったアジアに対して送られた一〇通の書簡に対して、成瀬の返書が送られたこと、この返書がアメリカのスワスマリア大学平和資料館に所蔵されていることの発見（当時本学教授で後にWILPF日本支部長になった杉森長子氏による）などが記され、戦時下に入っていく状況の中の平和運動の紆余曲折を詳述する過程で、上代タノが記した一九三八年当時の「婦人平和協会会報」巻頭言の言い回しについて次のように触れている。

ここで注目すべきは上代が国策に協力することをまず強調した後、言葉が続いて、婦人平和協会（WILPF加盟前段階の名）の真の活動目的は国際親善であり、その初志は、世界平和であることを忘れてはならないと強調していることである。すなわち、「婦人平和協会の会員として、吾々の目下なすべきことは、……広く国際知識を涵養して、自重自在、……人類協力の大理想に邁進すべく希つて止まないものである。」上代のこの巧みな「技」は際立って見事である。この文章を一読しても、危険なこと何事も起こらないと、誰しも思うように書かれている。しかし、いわゆる同志であれば、そこに通ずる何かを見出せる文章である。これは、それほどに命がけの発言であり、用心には用心を心がけること、発言は心せねばならないこと、そのようなしなければ、戦時下において平和運動を志すことは到底出来ないということ、同時代を生きる同志に悟らせるとともに、後世の人々にも暗示しているものと理解できよう。

こうした上代の揺るがない信念は、軍需工場へ勤労奉仕に行った女子学生の休憩時間に、英語教育を施していたという逸話にも伺われる。上代は、第二次大戦後いち早くWILPFの国際大会に赴き、最初の日本支部報告を行っている。同会と本学との強い関係は現在も続き、昨二〇〇七年一〇月には、スイス・ジュネーブの本部から来日した若き事務局長スージー・スナイダー氏が、附属校での英語による懇話会、大学での講義と討論と、密度の濃い時間を贈り物にしてくれた。

歴史的にこうした教育の洗礼を受けた卒業生たちの中から、アフガニスタンで夫を非業の死で失いながら「橋田メモリアル・モハマド君基金一〇〇人委員会」を立ち上げた橋田幸子や、反戦・地球環境問題をテーマ



小笠原訪問参加者によるポスター

とするドキュメンタリー映像作家・海南友子などが生まれているが、無論、平和教育そのものは正規のカリキュラムというわけではない。附属校から大学に至るあらゆる機会に、先輩や教師から折々の感化を受け、時にメディアの表舞台に躍り出ることがあるが、平素は至って静かに潜行している。

そうした日々の教育の一環として今年の夏に始まった小笠原訪問がある。小学校から大学に至る学生・生徒・児童の有志を、それと同数に近い教員がボランティアで引率して、

七月二八日早朝に竹芝



小笠原訪問

棧橋を出航、翌朝父島に入港して戦跡見学や島民の戦争体験談に耳を傾けながら、普段味わったことのない海洋の大自然に触れ、足かけ六日間の旅程を消化して八月二日に帰ってきた。親元を離れてさぞ心細かったに違いない小学生の面倒を上級学校生が見、彼女たちそれぞれの成長ぶりから、一週間足らずの非日常的体験の濃度が十二分に想像された。その体験は秋の学園祭の展示となり、会場が小部屋だったにも拘わらず見学者の高い関心を引いた。展示の中心力となったの

は無論、旅行で成長した学生たちであった。

ところで、この夏の軽井沢セミナーで私は、ここ数年続けてきた憲法問題を傍らにおいて、学生たちの自由選択に任せることにした。それには、五月三日の新聞報道で、意識調査の結果を知り、たとえ国民投票が行われても守るべき物は守りきれるといふ安心感が生まれたということもある。また今年が自分のセミナーを担当する最後の年ということもあって、押しつけではない自由なセミナーを持ってみたかったということもある。

学生たちは実に、思い思いの本を選んで来た。北村薫の「スキップ」や原田ハママの「カフィーを待ちわびて」だの、村上龍の「69 Sixty nine」や、森絵都の「カラフル」が出てくるかと思えば、安倍公房の「砂の女」や三浦綾子の「氷点」といった少し前の話題作が今以て若い読者の関心を引き続けていることも分かったし、金城一紀の「GO」や恩田陸の「ネバーランド」があり、古典好きには田辺聖子の「おちくぼ姫」や、山本淳子の手堅い「源氏物語の時代」、高橋克彦の「炎立つ」、変わったところでは梨木香歩の幽冥境を往き来する怖くない怪奇小説「家守綺譚」などがあった。そうした中で悲痛な現実をつきつけたのが高野悦子の「二十歳の原点」と灰谷健次郎の「太陽の子」、そしてロリー・ヘギの「みじかい命を抱きしめて」だった。早期老化症（プロジェリア）を扱ったこの実録は、ロリーという平凡な、というより向こう見ずな女の子が若気の至りからシングルマザーとなり、やがて授かった子供の類まれな奇病に絶望し、薬にまみれ、やがて信仰に出会って強く生き抜いていく姿、わけても、子供の奇病との闘いをホームページによって万人に公開し、結果的に人々を勇気づけていく経緯を描いている。難病の出現と克服、人類が次々と遭遇し、孤独な苦難の挙げ句に乗り越えてきた歴史へのこうした理解は、女性本来が持つナイーブな感受性と無関係ではあるまい。そして私は、本質的なこうした感受性こそ、現代社会の病巣を癒す欠くべからざる薬湯に他ならないと思うのである。

話は一見飛ぶことになるが、本学の西生田キャンパスで先頃、アフガニスタン駐日大使ハルン・アミン氏の講演を伺う機会を持った。その際、大使から、近著「アフガニスタンと日本の関係 アジアの二つの日出ずる国」を頂いた。私は不勉強にも、二〇〇二年から始まっている五女子大学連携アフガニスタン女子教育支援の事業に携わりながら、アフガニスタンがかつてKhorasan（ホラサン）——「太陽の昇るところ」——として

知られていた、ということも知らなかった。シルクロードの結節点として栄えてきた同国の歴史や文化は、私どもの貧弱な認識を超えて余りある。同書巻頭の論文は「ラピスラズリ」に始まるが、それこそ我が国の王朝文化の中で、高価な舶来品として珍重された「紺瑠璃」に他ならない（河添房江著「源氏物語と東アジア世界」NHKブックス・同著「光源氏が愛した王朝ブランド品」角川選書）。平山郁夫画伯の描きとった「パルミアン大石仏」の原像はテロによって無惨にも破壊されたが、私たち人類はお互いにもっと深く知り合い、尊重し合い、譲るべきは譲り合って共存しなければならない。そんなことは誰しも分かっているが、真の平和はなぜか一向に実現しないままである。戦闘による莫大な無駄を省き、人類共有の文化を守り、女子どもの命が保証される、世界中がそういう社会に到達するためには、女たちは更に更につけなくてはなるまい。